St. Luke's International University Repository

Exercise in Tanzania and Internship in World Health Organization Head Quarter for Master Course Students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長松, 康子, 山路, 野百合, 鈴木, 大地, 新福, 洋子, 堀内, 成子, 大田, えりか メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/13151

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

短　報

国際看護学修士課程における タンザニア演習と WHO 本部インターンシップ実習

長松　康子[1)]　山路野百合[2)]　鈴木　大地[2)]
新福　洋子[1)]　堀内　成子[1)]　大田えりか[1)]

Exercise in Tanzania and Internship in World Health Organization Head Quarter for Master Course Students

Yasuko NAGAMATSU[1)]　Noyuri YAMAJI[2)]　Daichi SUZUKI[2)]
Yoko SHIMPUKU[1)]　Shigeko HORIUCHI[1)]　Erika OTA[1)]

〔Abstract〕

To develop human resource who contribute global health, it is fundamental to provide theory and knowledge about global health nursing as well as provide opportunity to explore how to make a most of own expertise by experiencing the health issue of developing county. The master course of global health nursing developed the practice in Tanzania and internship in World Health Organization Head Quarter in 2016. Students who have not worked abroad experienced the issues in health and nursing in developing country and pondered how to contribute health in developing country as nursing experts. On the other hand, internship in WHO head quarter provided the opportunity to learn to experience the duty of United Nation as well as to get involved in the process of policy making.

〔Key words〕 global health, global health nursing, human resource development, internship, World health Organization

〔要 旨〕

グローバルヘルスに貢献する人材育成を行うためには，国際看護の理論や知識を伝達するだけでなく，実際に開発途上国に赴いて健康問題を目の当たりにする機会を与え，学生のこれまでの専門看護をどのように開発途上国の人々のために生かすかを考えさせる機会が必要である。そこで大学院国際看護学修士課程において，2016年度より修士課程大学院生に対するタンザニア連合共和国における演習と修士課程２年生に対する世界保健機関本部でのインターンシップ実習を開設した。タンザニア演習は，海外での看護経験がない学生にとって，開発途上国の健康課題や看護の課題を学び，自分の看護経験を活かした貢献を考える機会を与えた。一方，WHO 本部インターンシップは，国連機関での業務を実際に体験することで国連機関の役割と業務の理解を深め，政策決定にかかわることの重要性を学ぶ機会となった。

〔キーワーズ〕 グローバルヘルス，国際看護，人材育成，インターンシップ，国際保健機関

1）聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
2）聖路加国際大学大学院看護学研究科（修士課程）・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Master's program in Global Health Nursing

受付　2017年10月20日　　受理　2017年11月17日

Ⅰ．はじめに

近年，海外で看護職としてグローバルヘルスに貢献したいと考える者が増加している。ひとことでグローバルヘルスといっても，海外で臨床活動や公衆衛生活動を行うフィールドワーク，開発途上国の看護職の教育，国際機関での活動，日本国内に在住する外国人の健康問題，およびそれらすべてに関する研究活動と，貢献の仕方はさまざまである。いずれにせよ，異なる文化，言語，健康問題，医療システムを有する国々で人々の健康に寄与するためには，臨床経験を積んで，看護職としての知識とスキルを確実に身に付けていることが前提となる。大学院における国際看護教育では，学生がそれまでに築いてきた専門性をもとに，開発途上国を中心とする国々で健康問題のアセスメントや改善活動に必要な知識とスキルを伝授し，それぞれの学生がこれからグローバルヘルスに貢献する方向性を見出せるように導き，さらに研究として結実させる能力を身に付けさせることを目的としている。そのために，国際看護学特論の講義は英語で行い，グローバルヘルスの専門家を国内外から招いた講義や講演会の開催を実施している。しかし，異なる環境にある人々の健康を体感し，講義で学んだ理論と結び付けて研究へと発展させるためには，実際にグローバルヘルスの現場に出ることが必要である。

そこで，2016年度より修士課程１年生に対するタンザニア連合共和国（以下，タンザニア）における演習と世界保健機関（World Health Organization : 以下，WHO）本部におけるインターンシップ実習を開設したので報告する。

Ⅱ．タンザニア演習（国際看護演習Ⅰ）

１．タンザニア演習開設に至った経緯

2013年度より，ウィメンズヘルス助産学の学生を対象に，タンザニアにおける国際協働論演習を展開してきた[1)]。この演習は，聖路加国際大学（以下，本学）が2009年にタンザニアのムヒンビリ健康科学大学との間に締結した大学連携協定を基盤に学生・教員の交流を行ってきたフィールドで実施しており[2)]，開発途上国の助産活動を見学し，現地の看護職や学生にプレゼンテーションを行うことで，国際協働論特論で学んだ助産におけるグローバルヘルス理論への理解を深める教育効果をあげている[1)]。国際看護の視点からみると，タンザニアフィールドは，グローバルヘルスの主要課題である母子保健活動や本学と JICA の連携事業[3)] を見学できる優れたフィールドであるうえ，国際協働論演習と合同で演習を実施することで，未来の助産師との協働を体験することができる。そこで，国際協働論演習と合同で，国際看護学演習Ⅰをタンザニアで実施するに至った。

表１　国際看護学演習Ⅰ（タンザニア）行程

１，２日目	タンザニアへ出国
３日目	青年海外協力隊保健部会への参加 ムヒンビリ国立病院の看護職，看護学生に対する発表
４日目	ムヒンビリ国立病院見学 日本人専門家との交流
５日目	JICA ボランティア総会への参加
６日目	バガモヨ県立病院付属看護学生との交流
７日目	バガモヨ県立病院見学 本学助産学生による，新生児救急蘇生指導
８日目	貧困地区の子どもに対する給食事業への参加 ふりかえりとまとめ
９，10日目	日本へ帰国

２．タンザニア演習内容と意義

2016年度は，タンザニアにおいて10日間の演習を実施した。全行程は**表１**に示すとおりである。

演習の目的は，異なる文化，言語，健康問題，医療システムを持つ国を理解することである。そのうえで，自分ならどのようにタンザニアの人々の健康に貢献できるかを考えさせる。また，現地の看護職や看護学生に対して，これまでの看護専門性を活かしたプレゼンテーションを課すことで，言語習得意欲を掻き立て，言語能力を補うコミュニケーション能力を養い，自分のこれまでの専門性を見直させる。さらに，異なる天候のもと，なれない飲食物や時差に苦しみながら，チームで演習目的を達成する経験は，国際看護に必要なチームワークと安全確保・健康管理を経験する良い機会となる。何より，現地の方々に親切にしていただくことで，グローバルヘルスに貢献する意欲がますます高まることを期待している。

３．タンザニア演習における大学院生の学び

以下に，2016年度の演習を履修した修士１年生の学びと感想を記述する。

●鈴木大地

タンザニアの看護師，助産師，看護学生，助産学修士課程大学院生との交流を実施し，ディスカッションを実施した。ダルエスサラームではムヒンビリ国立病院の視察を行い，併設されているムヒンビリ健康科学大学を訪問し，当大学院生と本学研究者同士のディスカッション並びに本学研究者からのプレゼンテーションを実施し，両国の医療の違いについての理解を深めた。

また JICA の保健部会へ参加し，JOCV 隊員の活動内容を知ると同時に，タンザニア国内における医療状況や看護師教育に関する意見交換がなされた。さらに JICA の総会では保健分野以外の隊員の活動を知り，言語や文化的な背景が異なる国での活動の苦労や工夫も聞くこと

写真１　タンザニア演習におけるプレゼンテーション

ができた。バガモヨでは，ヘルスセンターの視察を通し，都市部病院との違いについて学ぶと同時に，かつて奴隷として港から他国に連れて行かれた土地柄でもあり，タンザニアの歴史的背景も目の当たりにし，大きな学びとなった。

現地看護・助産師学生との合流では，学生たちの高い学びの意欲を実感し，お互いに意見交換を行うことで，学び合うことができた。NGO 活動では，韓国が主な母体となっている団体が，１日５ドル以下で生活している貧困層の子どもたちを対象にした給食配膳活動を行っており，実際に配食活動へ参加した。NGO の運営や活動の実際について学ぶことができた。

タンザニア演習の経験を生かして，研究のテーマとフィールドとして，インドネシアにおける父親の役割に関する研究を行っていきたいと考えており，９月には実際に現地に赴き視察を行う予定である。また研究と並行して WHO 本部でのインターンシップも調整中である。これらの研究並びにインターンシップを行うために必要な語学能力を習得しつつ，研究に必要な知識や能力，態度を習得していきたい。

Ⅲ．世界保健機関本部インターンシップ実習（国際看護実習）

１．WHO の概要

WHO は，1945年に設立された健康を担う国連機関である[4)]。ジュネーブ本部と６つの地域事務局で組織され，本部は，１．リーダーシップの発揮，２．加盟国，国連機関，援助機関，NGO，WHO 協力センター，民間セクターとのパートナーシップ，３．ガイドラインとスタンダードの作成，４．研究の推進，５．技術提供，６．世界の健康状態の監視と傾向の評価という６つの役割を担っている。感染症や母子保健といった伝統的な健康問題はもちろんのこと，近年急増している非感染性疾患や，エボラ出血熱などの新たな健康問題など，様々な健康問題に対して，それぞれの部署が様々な取り組みを行っている。WHO の活動は，一年に一度行われる World Health Assembly（WHA）で決定された政策や財政方針などに沿って実施される。

２．WHO インターンシップ実習開設に至った経緯

臨床分野に属する者にとって，国連機関の意義は理解できても，実際の活動や職員の業務を理解するのが難しい。国連機関インターンシップ経験は，国連機関の活動や業務を体験させてもらうことで国連機関に関する理解を促すとともに，優秀な人材を国際機関に知ってもらうための重要な機会となる。グローバルヘルスに貢献するためには，フィールドワークだけでなく，政策決定にかかわることが必ず必要になることから，健康を担う国連機関である WHO でのインターンシップ実習を開設した。

３．WHO インターンシップにおける大学院生の学び

以下に，2016年度に３カ月間のインターンシップ実習を履修した修士２年生の学びと感想を記述する。

●山路野百合

WHO には，約300名のインターンが働いており，３カ月から６カ月間，監督・管理・監修を担当するスーパーバイザーの下で働いている。私は，緩和ケアユニットに配属され，Dr. Bouësseau Marie-Charlotte の下で働いた。緩和ケアユニットは，緩和ケアの必要性を世界に伝えること，全ての人々に緩和ケアを提供できるようガイドすることを目標に活動している。緩和ケアは，診断時から患者が亡くなった後までも続くケアで，患者がどのような状態であっても提供されるべきであるとされているが，そのことが正しく理解されていないうえ，低～中所得の国々に住む人々と高所得国に住む人々が受ける緩和ケアに格差がある。WHO は，特に緩和ケアにアクセスしにくい人々に対して支援を提供することを目標としており，１．開発途上国，２．災害や戦争などの人道危機，および３．小児の３つの領域における緩和ケアの改善に取り組んでいる。私は，小児の緩和ケアを中心に文献検索を行い，それらの現状と課題，改善方法に関するデータを収集し，まとめた。また，医療資源の少ない低・中所得国における優れた緩和ケアモデルについて文献検索，オンライン検索を行い，エビデンスを収集した。さらに，WHO 総会では，所属部署のブースで活動紹介を行った。

WHO では「全ての人々に健康を」という共通の目標を達成すべく，世界各国から集まった優秀な人材が，言語や文化を超えて共に働いていた。世界には健康問題に対して支援を行う機関や団体が数多くあるが，政治的に中立で，金銭的利潤を追求しない WHO は他の機関が扱

写真 2　WHO 総会における所属部署の活動紹介

わない健康課題にも積極的に働きかけていた。WHO にとって重要なのは，地球上のすべての人々が健康になるにはどうしたらよいかということである。そのためには人々が恐れる感染症においては最前線で対策を講じるし，ガイドラインは低所得国の人々が実施できるものを作る。「健康のために一部の誰かができることではなく，開発途上国の人でもできることを見つけて。そうすれば誰でもできるから，みんなが健康になれる」とは，上司から繰り返し言われたことである。

約 3 カ月間現地に住み，英語やフランス語が飛び交う中で生活することは，困難であったが，たくさんの人々との出会いがあり，世界に目を向ける非常に貴重な経験となった。今後も世界の子どもの緩和ケアが少しでも改善するようインターンで得た経験や人脈を活かして，邁進していきたい。

4．WHO インターンシップの課題

1）資金の確保

国連機関におけるインターンシップにかかる費用は全てインターンが負担しなければならない。最低でも 3 カ月とされるインターン期間の生活費と渡航費を学生自身が賄うのは負担が大きいので，支援策が必要である。

2）実習機関との関係強化

WHO 本部には年間2,000名からのインターン志望が寄せられる。世界各国の優秀な人材の中から，本学学生を選択してもらうには，WHO が求める語学，コミュニケーション力，文献検索力などの能力を学生に身に付けさせるとともに，WHO との関連を強化する必要がある。WHO が求めるインターンを輩出することのできる大学であることを認識してもらえるよう，定期的に印象付ける必要がある。初年度は，学生がインターンシップで最大の貢献ができるよう，教員が上級インターンとして準備を行った。

Ⅴ．まとめ

グローバルヘルスに貢献する人材育成を行うためには，国際看護の理論や知識を伝達するだけでなく，実際に開発途上国に赴いて健康問題を目の当たりにする機会を与え，学生のこれまでの専門看護をどのように開発途上国の人々のために生かすかを考えさせる機会が必要である。そこで大学院国際看護学修士課程において，2016年度より修士課程 1 年生に対するタンザニア連合共和国における演習と，修士課程 2 年生に対する世界保健機関本部でのインターンシップ実習を開設した。タンザニア演習は，海外での看護経験がない学生にとって，開発途上国の健康課題や看護の課題を学び，自分の看護経験を活かした貢献を考える機会を与えた。一方，WHO 本部インターンシップは，国連機関での業務を実際に体験することで国連機関の役割と業務の理解を深め，政策決定にかかわることの重要性を学ぶ機会となった。

引用文献

1）新福 洋子，ほか．大学院助産教育における国際協働の基礎　タンザニアでの学びと今後の展開．日本助産学会誌．2015；28(3)：475.
2）Shimpuku Y, et al. Global collaboration between Tanzania and Japan to advance midwifery profession: A case report of a partnership model. J Nurs Educ Pract. 2015；5(11)：1－9.
3）新福洋子，ほか．聖路加 JICA 連携プログラム「タンザニア連合共和国母子保健支援ボランティア連携事業」の実践報告．日本助産学会誌．2016;29(3)：586.
4）World Health organization. About WHO.［2017-09-26］. http://www.who.int/about/history/en/